係結びの消滅から見えてくるもの

半藤　英明（日本語文法）

概して、言葉は人間の認識の反映である。従って、言葉に変化が現れれば、人間の認識に変化があったということである。古代日本語に見られた「係結び」の消滅は、古代語から現代語への変化（便宜的に「近代語」を想定しない）の一つであるが、それは日本人の認識の変化を物語る。

＊

学校教育で古文を習い始めると、間もなく学習するのが「係結び」である。そこでは、①「ぞ・なむ・か・や」の助詞が文中に現れると文末語が連体形になり、「こそ」では已然形になることを以て、それらの助詞が活用形の拘束をもたらすこと、②「ぞ・なむ・こそ」の係結びは強調の働きにあり、「か・や」では文意が疑問になること、を学ぶのがせいぜいのところである。そのように「係結び」を古文読解のためのテクニカルなものとして理解するのは、その後の学習に有益なことではあるが、古代語に於ける「係結び」の役割と意義とを思えば、そのような知識だけに留めておくことは賢明ではない。

「係結び」がどうして存在するのか、何故そのようなものが生まれ、また、現存しないのか、といった論点は、「係結び」の本質を理解する上で必須のものである。更に、そこからは古代語の言語体質といったものも浮かび上がらせることができる。近年、「係結び」の研究は、従来の実例分析型の実証的なものから理論的枠組みの構築へと大きく舵を切ったが、筆者は「操舵手」の一人である。その筆者に、このところの研究で見えてきたのは、「係結び」の消滅に伴う日本人の認識の変化である。

＊＊

「係結び」とは、一言で言えば、文中の係助詞と文末語の活用形の拘束形式とによって非強調構文に対する「強調構文」を演出するものである（「か・や」にしても、強調構文たる疑問表現を作っている）。強調という働きは、文に対して言葉として特定の意味を発揮するものではない。文の情報を如何に伝えるかという伝達上の作為である。古文・現代文を問わず、文の強調形式には倒置、省略、繰り返し、副詞の添加など様々なものがあるが、古代語に於いて更に

複数の助詞による「係結び」が存在していたことは、そこでは現代語よりも多様な強調形式が求められていたことを示している。しかも、多くの古典作品で「係結び」が多用されている事実は、古代語がかなり伝達性を重視する環境にあったことを思わせる。このことは、そのような言語体質にあったからこそ「係結び」という強調形式が生まれたのだとも換言できるから、古代語の体質と「係結び」とは切り離すことのできない関係であったと言い得る。

＊＊＊

従って、その「係結び」が現存しないということは、現代語の体質が伝達性重視の様相から別の在り方へとシフトしたということになるであろう。

現代語は、言葉から文意がそのまま理解されることを尊ぶ。それは、言語活動が広く万人のものとして大衆化するには必然である。今や、曖昧な物言いは、可能な限り、排され、前後の文脈から文意を測る苦労は減少した。用言や助動詞といった活用語の活用形に依存して強調構文を作ることも一般的でなくなった。そのような変化は、並行的に「係結び」のように形式性の強い強調形式を嫌い、上述のような、いわば単純で分かりやすい形の強調形式で十分なものとした。つまり、現代語が「係結び」を合理化したことは、現代語の体質が言葉を如何に伝えるかということよりも、言葉で何を伝えるかを重視することへと改まったことと連動しているのである。

このことは、当然、今日の日本人の認識を反映するものでもある。現代のように情報化・高速化した社会では、言葉を如何に伝えるか、などと腐心して悠長に構えてはいられない。短く、素早く、分かりやすく、がコミュニケーションの達人と目される時代、多くの人々の価値観は短兵急な合理性にあると言える。現代語の体質と我々の認識とは、まさに一体的である。

日本人の認識は、古代語の時代の融通を聞かせる社会感覚から今日の合理主義へと大きく変化した。係結びの消滅からは、そのような読み方ができる。